

軍事史学

第52卷 第1号

巻頭言

明治の軍人と昭和の軍人

明治の軍人は偉かったが、昭和の軍人はそうではなかった、という「通説」がある。一方は日清・日露の戦争に勝ち、他方は戦争に負けただけだから、そう言われても仕方がない。ただし、明治の戦争と昭和の戦争では、その規模も性質も大きく異なっている。兵器を含む軍事技術が格段に進歩し、作戦用兵の手法も変化した。将兵を含む人々の価値観や心理も変わった。昭和の軍人が抱えていた問題は、明治の軍人のそれよりも複雑化し、困難さを増していた。しかし、そうした状況変化を考慮してもなお、明治期のほうが指導者として優れた軍人が多かったように思われる。では、実際に両者はどこが違ったのか、指導的な陸軍軍人の単純な比較をしてみよう。日露戦争時の陸軍首脳（三長官と軍司令官）と大東亜戦争開戦時の陸軍首脳を比較してみると、前者は大半が一八四〇年代の生まれで、全員、軍事専門教育を受けていない（二部が速成教育を受けただけ）。後者は大半が一八八〇年代生まれ、全員が陸士、陸大を卒業している。つまり、昭和の陸軍首脳は、明治期に生まれ、明治期に教育を受け、明治期に人格形成をした。その意味で実は「明治人」であり、軍事プロフェッショナルでもあった。これに対して、明治の陸軍首脳は江戸期生まれで、「武士」としてのエートスをまだ残していたと考えられよう。

このような違いからどんなことが言えるだろうか。明治の指導的軍人は、軍事専門職としての教育を受けていないが、「武士」としての素養を持っていた。その素養は、兵法にとどまらず、今日的に言えば、幅広い「教養」に通じるものがあつた。それゆえ彼らは軍事力の限界をわきまえて、政治的見識を兼ね備えていたのである。むしろ日露戦争までには陸軍のプロフェッショナル化がかなり進行しており、陸士の卒業生が参謀本部の部長や旅団長クラスに昇進していた。その意味で、日露戦争はトップの「武士」とミドルの軍事プロフェッショナルとの微妙なバランスで戦ったと言えよう。

これに比べると、昭和期の陸軍はトップもミドルも軍事プロフェッショナルによって占められている。昭和期の陸軍指導部には、合理的なテクノクラートとして、分析的能力に優れた軍人が少なくなかったが、全体として見れば、しばしば視野狭窄に陥り、政治的な叡智や見識に欠けるケースが多かった。この欠陥が何に由来するのか、プロフェッショナル教育の必然的な欠陥なのか、よくは分からない。指導的立場に立つ軍人は合理的・分析的能力だけでなく「慎慮」と叡智、大局的判断力を持たねばならない。だが、合理的・分析的能力ならば教育によって養成できるだろうが、「慎慮」や叡智はどのようにしたら身につけられるのか。これは、軍人リーダーだけでなく、リーダー一般にとって永遠の課題なのかもしれない。

(戸部良一)